

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月30日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21390589

研究課題名（和文）周産期からの虐待予防を実現する家族看護技術の確立と医療連携システムの構築

研究課題名（英文）Establishment of family nursing skills and liaison systems between hospitals and other social resources to realize child abuse prevention from the perinatal period

研究代表者

上別府 圭子（KAMIBEPPU KIYOKO）

東京大学・大学院医学系研究科・教授

研究者番号：70337856

研究成果の概要（和文）：周産期の母親を対象とした複数の前向き観察研究および準実験研究、家族機能や家族看護に関する尺度開発を行った。周産期からの虐待予防を実現する家族看護技術の確立と医療連携システムの構築に関して、これまでの研究実績を踏まえたうえで、研究期間に一定の成果が得られた。メンタルヘルス支援とともにアタッチメント（ボンディング）の支援が必要であることなど、新しい課題が見えた。さらに、東大版 Family APGAR などのツールも開発され、次なる研究への展望が広がった。

研究成果の概要（英文）：We conducted several prospective observational studies and quasi-experimental studies with perinatal mothers, and developed the scales to measure family functioning and family nursing practice. Regarding our objectives to establish family nursing skills and liaison systems between hospitals and other social resources to realize child abuse prevention from perinatal period, we have achieved our goal with worthwhile outcomes in the research period adding knowledge to previous research. We found new challenges along with promoting maternal mental health, such as supporting perinatal mothers to nurture attachment (bonding) system for mother-infant relationship. We got prospects for the next research by using the developed scales such as the University of Tokyo version of Family APGAR.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2010年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
2011年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
総計	12,900,000	3,870,000	16,770,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：うつ病一分娩，家族看護，周産期，児童虐待，対象愛着性，多機関医療協力システム，評価研究，予防的保健医療サービス

1. 研究開始当初の背景

研究代表者である上別府は、厚生労働省科学研究費補助金子ども家庭総合研究事業「育児機能低下と乳児虐待の評価パッケージの作成と、それを利用した助産師と保健師による母親への介入のための教育と普及」(平成16-18年度、主任研究者：吉田敬子)において、地域保健スタッフには、メンタルヘルス専門家によるスーパーバイズのニーズ等が高いことを明らかにした(上別府他, 2007)。さらに、上別府ほか当家族看護学分野教員を中心とした研究チームは、(財)子ども未来財団の平成19・20年度児童関連サービス調査研究等事業として「周産期のメンタルヘルスと育児支援のシステム構築に関する研究」を実施し、各人口規模別地域における子どもの虐待防止システムの実態を明らかにした(上別府他, 2007; 栗原他, 2010; 杉下他, 2011; Sugishita et al, 2013)。

一方、当家族看護学分野では、平成15年度より東大家族ケア研究会を発足し、症例研究会やシンポジウムとして、家族ケアの技術に関する啓発事業を開催している。とくに平成18, 19年のシンポジウムにおいては子ども虐待予防システムをとりあげ、本学内外の保健・医療・福祉関係者を対象に、虐待予防システムに関する情報発信を行なった。平成20年度には(財)メンタルヘルス岡本記念財団から活動助成金を得て、「医療者向け『周産期のメンタルヘルスと育児支援』の啓発研究活動」の一環として、去る8月1日に本学医学部附属病院にて、勉強会を開催した(池田他, 2009)。

2. 研究の目的

本研究では、子どもの虐待予防のための、医療—保健—福祉連携システムモデルを構築する。中でも、周産期からの予防に焦点を当て、出産後早期の高リスク事例の発見および介入はもとより、妊娠期からの高リスク事例の発見と介入を可能にする医療—保健—福祉のシステムモデルの提案および、スクリーニングと家族看護ケアの技術を普及し評

価する(確立する)ことを目的とした。

虐待予防システムとして、機関内多部署多職種連携および医療—保健—福祉連携による密なネットワークシステムの構築を目指す。本研究では、それぞれの機関に潜在する高リスク事例、スクリーニング・ツール、面接技術上の課題、連携を促進するためのツールやシステムを明らかにする。独創的な点は、妊娠期からの子ども虐待予防に焦点を当てた、はじめての多軸的研究である点、また、研究と啓発活動を併せて実施する点である。予想される結果として、高リスク事例の早期発見および、医療機関内および医療—保健—福祉の連携が促進され、総体としてわが国の虐待予防対策が有効に機能するという意義がある。

3. 研究の方法

研究は、研究1)~6)より成る。

1) 周産期のストレスが母子相互作用に及ぼす影響に関する研究(山下他)

周産期に不安や抑うつを経験した母親に特徴的な、乳児との相互作用のパターンを同定し、また相互作用のパターンが乳児の発達および社会情緒的転帰に与える影響を明らかにするために、7-9ヶ月児の母子相互作用、母親のメンタル面の評価、および12ヶ月時点での乳児の発達を評価した。相互作用の評価はGlobal Mother-Infant Interaction (GMII; Murray et al., 1997)を、母親のメンタル面の評価はエジンバラ産後うつ病質問票(EPDS; Cox et al., 1987)および精神科診断面接Structured Clinical Interview for DSM-IV (SCID; NYSPI, 2002)を、乳児の発達転帰はデンバー発達スクリーニングテスト(DDST; Frankenberg, 2002)を用いて評価した。

2) 妊婦のアタッチメント・スタイルが産後うつ病発症に及ぼす影響に関する研究

(池田他)

妊婦のアタッチメント・スタイルに注目し、産後うつ病発症との関連を研究した。妊娠後

期と出産後1ヶ月の2時点において質問紙調査及び面接調査を実施し、産後うつ病に影響するリスク要因について量的・質的分析を行った。アタッチメント・スタイルの評価は、アタッチメント・スタイル面接:ASI (A Bifulco et al, 1998)を用い、妊娠期の抑うつの評価には EPDS、産後うつ病の評価には M.I.N.I.精神疾患簡易構造化面接(Sheehan et al., 1998)を用いた。

3) 妊娠うつと産後うつの関連:エジンバラ産後うつ病自己評価票を用いた検討 (杉下他)

日常の産科臨床において、助産師らが簡便に行えるスクリーニング法を探求した。妊娠中期から後期および、産後1ヶ月時点で、EPDSを用いて産後うつ病を評価した。

4) 産後うつ病の重症化予防を目的としたプログラムの開発と評価 (上別府・池田他)

① 産後うつ病の重症化予防を目的としたプログラムの開発と実施可能性の評価

② 産後うつ病の重症化予防を目的としたプログラムのインパクト評価

産後うつ病の重症化を予防することを目的に、妊娠期に提供するプログラムを開発した。プログラムは、妊娠中期以降2回の母親学級および、産後4日目のベッドサイドにおいて提供された Maternal Mental Health Promotion Program (MMHPP) である。妊娠の受け止めの振り返り、産後うつ病の知識増大、パートナーとのコミュニケーション促進をねらっている。

介入群と対照群に対して、介入前(T1)および出産後1ヶ月時点(T2)で調査票を実施した。奇数月の母親学級参加者を対照群、偶数月の母親学級参加者を介入群とし、MMHPPを8ヶ月実施した。プライマリー・エンドポイントは、エジンバラ産後うつ病質問票 (EPDS) とし、セカンダリー・エンドポイントは、パートナーとのコミュニケーションの頻度とした。各変数について T1 の値を共変量とした共分散分析により、介入の効果を評価した。

5) 精神疾患を有する母親がいる子どもへの

支援:精神科医療機関における専門職者インタビューからの質的分析 (大野他)

精神疾患を有する女性は、虐待がハイリスクであると言われている。精神疾患を有している患者の子どもを、精神科専門職者がどのように考え支援しているのかについて、精神科専門職者に尋ねることで質的研究を行った。

6) これからの家族看護実践および家族看護学研究のための基盤研究

① 「家族機能尺度」の開発:日本語版 Family APGAR (国分他)

② 家族看護態度調査票 (The Families' Importance in Nursing Care - Nurses' Attitudes: FINC-NA) の日本語版開発 (渡邊他)

これらの研究は、家族への介入研究や、家族看護学の現任教育の効果を測るために、今後、有用と考えられる基礎的な研究である。日本ではこれまで、長嶺ら(1988)の Family APGAR が使用されてきたが、時代にそぐわない訳があると思われたため、長嶺の許可を得て、日本語版の再開発を実施した。順翻訳・逆翻訳・パイロットテストの手順を経て日本語版 Family APGAR を作成した後、一般成人男女 1200 名を対象にインターネット調査、一般中高生 712 名を対象に自記式質問紙調査を行い、妥当性・信頼性の検討を行った。FINC-NA(Benzein et al, 2008)の日本語版開発は、原作者から了承を得た後、順翻訳・逆翻訳・パイロット調査の手順を経て作成した。その後、妥当性・信頼性検討のための調査を病院勤務の看護師 1101 名に依頼し、また再調査を 117 名に依頼した。

4. 研究成果

1) 周産期に不安障害または気分障害の診断を受けた母親(不安抑うつ群) 16 名、および、地域小児科を受診した母親(対照群) 20 名を対象とした。結果、7-9 ヶ月時点の診断面接で、不安抑うつ群は軽快していた。抑うつ症状は、EPDS 平均点 10.5 点と 4.8 点で、不安

抑うつ群の方が有意に高かった。同時期の母子相互作用では、不安抑うつ群で応答性や感受性が低く、また乳児との距離で侵入的な行動や言葉で接する母親が6名と多かった。乳児の側は、回避的で静かな反応を示す乳児が多かった。12ヶ月時点で、発達の遅れが認められた児はいなかった。

母子相互作用は、子どもの発達の長期的予測にとって重要な役割を果たしていることが知られている。本研究を通じて、母親の抑うつ症状や不安症状の軽減をはかるのみでなく、母子相互作用への介入が必要であることが示唆された。

2) 対象は、76名の妊婦であった。産後うつ病の発症に有意に関連していたのは、暮らし向き、妊娠後期の抑うつ、アタッチメント・スタイルであった。アタッチメント・スタイルをリスク要因に加えるモデルが、産後うつ病の予測率を高めることが確認できた。

産後うつ病を発症した者には、①出産時に児に医療的介入が必要、②出産後の自身の体調が不調であるなどの母親自身や児側の要因のほか、③夫に対して妊娠についての打ち明けをしていない、④夫の共感的な応答が少ない、⑤出産後、夫が単身赴任などで不在などの、夫の要因や夫へのアタッチメントの要因が関係していた。したがって、妊娠後期のアタッチメント・スタイルが不安定であっても、出産を機に夫に打ち明けができるようになり、共感的な応答を得た者は、それまでのアタッチメント・スタイルを肯定的な方向へ変化させていた可能性が伺えた。

本研究は、妊婦のアタッチメント・スタイルを妊娠期から把握することによって、それぞれの妊婦のアタッチメント・スタイルに添った心理社会的支援の可能性を示唆した。さらに、妊婦のアタッチメント・スタイルは、先の山下のいう乳児期の母子相互作用につながるものとして、重要な意味を成すと考えられた。

3) 妊婦 161名の研究参加を得た。妊娠期にEPDSが9点以上であった者は、23名 14.3%

で、産後にEPDSが9点以上であった者は、24名 19.8%であった。妊娠期に9点以上であった者が産後にも9点以上であるリスクは、妊娠期に9点未満であった者に比較して、17倍であった。EPDSの項目を精査すると、問6の「することがたくさんあって大変だった」のみ、EPDS 9点以上との関連が見られなかった。問6を除く9項目版で、より予測率が高まることが示唆された。

妊娠期にEPDSを用いて8/9点でスクリーニングを行うことは、臨床的に意味があると結論づけられた。

4)

① 先行研究、理論モデル、経験豊富な助産師、実施した助産師のコメント、受講した妊婦の感想、プログラムからの脱落率などにより、形成評価、プロセス評価を行ったところ、適正と判断された。

② 介入群 27名、対照群 35名のうち、T2での評価が行えた者は、23名と29名であった。T2時点で両群間のEPDSには有意差はなく、パートナーとのコミュニケーションの頻度は介入群で有意に高かった。

本プログラムは、産後1ヶ月時点での産後うつ病の重症化予防には効果はないが、パートナーとのコミュニケーションの頻度を促進していた。乳児虐待予防への効果としては、家族機能も評価項目に含める形での、より長期のフォローアップが必要と考えられた。

5) 精神科専門職者 29名にインタビューを実施し、精神科専門職者は子どもの生活が脅かされていないかをアセスメントした上で、患者を通して子どもを支援したり、患者の理解者としての子どもを直接支援したりしていた。

6)

① 13歳から78歳までの対象者で、実施可能性・信頼性・妥当性が示された。今回開発したものを東大版 Family APGARとした。

- ② 妥当性および信頼性が確認され、FINC-NA 日本語版は使用可能であることが示された。この FINC-NA の日本語版開発は、国際家族看護学会でも注目を集めた。

このような尺度が使用可能になることで、家族支援をする看護職者の態度や、家族機能の簡便な測定が可能になれば、教育プログラムや介入研究の評価が可能になり、家族看護実践が進むことが期待される。ただし、何を評価しているのかを常に検討しながらの、使用が必須であろう。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 22 件)

- 1) Ikeda M, Kamibeppu K. Measuring the risk factors for postpartum depression: development of the Japanese version of the Postpartum Depression Predictors Inventory-Revised (PDPI-R-J). *BMC Pregnancy and Childbirth*. **13**:112, 2013 doi:10.1186/1471-2393-13-112 (査読有り)
- 2) Sugishita K, Kurihara K, Murayama S, Kamibeppu K: Approach to perinatal mental health and child abuse prevention in Japanese Prefectural health centers. *Health* **5(4)**: 735-742, 2013 doi:10.4236/health.2013.54097 (査読有り)
- 3) 杉下佳文, 上別府圭子: 妊娠うつと産後うつの関連—エジンバラ産後うつ病自己評価票を用いた検討—. *母性衛生* **53(4)**: 444-450, 2013 (査読有り)
- 4) 池田真理, 西垣佳織, 上別府圭子: 妊婦の「妊娠体験」とそれを夫と共有することの意味—アタッチメントの視点からの考察. *心理臨床学研究* **31(3)**, 2013(in press) (査読有り)
- 5) Yoshida K, Yamashita H, Conroy S, Marks M, Kumar C: A Japanese version of Mother-to-Infant Bonding Scale: factor structure, longitudinal changes and links with maternal mood during the early postnatal period in Japanese mothers. *Archives of Women's Mental Health* **15**:343-352, 2012 doi: 10.1007/s00737-012-0291-1 (査読有り)
- 6) 杉下佳文, 栗原佳代子, 古田正代, 池田真理, 山本弘江, 大塚寛子, 上別府圭子: 周産期メンタルヘルスと子ども虐待対応に関する全国医療機関の取り組み. *日本周産期・新生児医学会雑誌* **47(1)**: 86-91, 2011 (査読有り)
- 7) Chen J, Murayama S, Kamibeppu K: Factors related to well-being among the elderly in urban China focusing on multiple roles. *Biosci Trends* **4(2)**: 61-71, 2010 (査読有り)
- 8) 上別府圭子, 杉下佳文, 栗原佳代子, 村山志保, 山崎あけみ: 周産期のメンタルヘルスと虐待予防のための育児支援システム構築に関する研究(1): 地域母子保健からの検討. *子どもの虐待とネグレクト* **12(1)**: 61-68, 2010 (査読有り)
- 9) 栗原佳代子, 杉下佳文, 池田真理, 山崎あけみ, 古田正代, 山本弘江, 大塚寛子, 上別府圭子: 周産期のメンタルヘルスと虐待予防のための育児支援システム構築に関する研究(2)医療機関からの検討. *子どもの虐待とネグレクト* **12(1)**: 69-77, 2010 (査読有り)
- 10) 岩元澄子, 中村美希, 山下洋, 吉田敬子: 妊産婦の妊娠の状況と抑うつ状態との関連. *保健医療科学* **59(1)**: 51-59, 2010 (査読有り)
- 11) Kamibeppu K, Furuta M, Yamashita H, Sugishita K, Suzumiya H, Yoshida K: Training health professionals to detect and support mothers at risk of postpartum depression or infant abuse in the community: a cross-sectional and a before and after study. *Biosci Trends* **3(1)**:17-24, 2009 (査読有り)

[学会発表] (計 33 件)

- 1) Yoshida K, Yamashita H: Clinical Survey of the Mother-Infant Mental

- Health in Kyushu University Hospital: Psychiatric characteristics of consecutive 109 women and their infants. International Biennial Congress of The Marché Society, 2012.10.3-5, Paris, France
- 2) Yamashita H, Yoshida K, Kanba S: Symposium Elevated perinatal stress: Clinical implications and intervention strategies for infants and families II. Mother-Infant Interaction and infant outcome in mothers with mood and/or anxiety disorder in perinatal period. 13th World Congress of the World Association for Infant Mental Health, 2012.4.20, Cape Town, South Africa
- 3) Yamashita H, Yoshida K, Kanba S: Impact of perinatal stress on mother-infant interaction; (1) Relationship between intimate partner violence and maternal bonding failure. 13th World Congress of the World Association for Infant Mental Health, 2012.4.18, Cape Town, South Africa
- 4) Yoshida K, Fujinaga Y, Yamashita H : Clinical survey of the Mother-Infant Mental Health Clinic in Kyushu University Hospital ~Psychiatric characteristics of consecutive 109 patients~, American College of Neuropsychopharmacology. 50th Annual Meeting, 2011.12.5, Hawaii, USA
- 5) Ikeda M, Kamibeppu K: The relationship between women's attachment style and postpartum depression. 10th International Family Nursing Conference, 2011 June 24-28, Kyoto, Japan
- 6) Watanabe E, Matsumoto K, Kamibeppu K: Development of the Japanese Version of Families' Importance in Nursing Care- Nurses' Attitudes. 10th International Family Nursing Conference, 2011 June 24-28,

Kyoto, Japan

[その他]

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/fn/Reports.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上別府 圭子 (KAMIBEPPU KIYOKO)

東京大学・大学院医学系研究科・教授

研究者番号：70337856

(2) 研究分担者

山下 洋 (YAMASHITA HIROSHI)

九州大学・大学病院・特任講師

研究者番号：20253403

(3) 連携研究者

金生 由紀子 (KANO YUKIKO)

東京大学・大学院医学系研究科・准教授

(H21,22,23年度)

研究者番号：00233916

杉下 佳文 (SUGISHITA KAHUMI)

東京大学・大学院医学系研究科・助教

(H21,22年度)

研究者番号：00451766

山本 弘江 (YAMAMOTO HIROE)

東京大学・大学院医学系研究科・助教

(H21年度)

研究者番号：80251073

池田 真理 (IKEDA MARI)

東京大学・大学院医学系研究科・助教

(H23年度)

研究者番号：7610210

(4) 研究協力者

大野 真美 (ONO MAMI)

東京大学・大学院医学系研究科・修士課程

(H22,23年度)

国分 麻紀 (KOKUBU MAKI)

東京大学・大学院医学系研究科・修士課程

(H22,23年度)

渡邊 栄美 (WATANABE EMI)

東京大学・大学院医学系研究科・修士課程

(H21,22年度)